

保育者養成校学生の小児病棟実習における学びの検討 —テキストマイニングによる医療関連語の理解についての分析—

入江 慶太¹

Examination of the learning in the children's ward training of the early childhood care and education course students — Analysis about the understanding of medical related vocabulary by text mining —

Keita Irie¹

Abstract : The purpose of this study is to clarify the learning in the children's ward training of the early childhood care and education course students from the aspect how understand “team medical care” and “medical childcare” in broad perspective.

The following were clarified from the freedom description answer of them by text mining. Through training, they understood variety of the cooperation between “team medical care”. In addition, they turned into the affirmative image from negative one about “team medical care”. About “medical childcare”, they turned into the all children who included a development handicapped child from illness child about the object of “medical childcare”. And, they were able to know the present conditions by “medical childcare” in detail. Consequently, the future problem is to develop the curriculum that children's ward training links each lecture.

Key Words : children's ward training, team medical care, medical childcare, text mining

目 的

保育者養成において、乳幼児や施設利用者といった生身の人間と関わる学外の実習は、学内における学びを確認し、より確かな専門的知識・技能を身に付ける機会になると同時に、社会人としての自覚や使命感を促し、自らの人間性を磨く機会ともなっている。保育者養成課程のある大学及び短期大学、専門学校等のカリキュラムでは、こうした学外における実習は「保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「幼稚園教育実習」として位置づいており、保育士資格とともに幼稚園教諭免許を取得するためには、それぞれの実習が必修科目となっている。

本学医療保育科はこのような必修実習に加え、3年次、病児保育コース選択者には小児病棟実習(90時間、2単位)を必修としている3年課程の保育者養成校である。本稿では、この小児病棟実習に焦点を当て、学生の学びについて明らかにしていきたい。

先行研究を概観しても、小児病棟実習における保育者養成校学生の学びについての研究はほとんどない。その一番の理由として、2年間、あるいは4年間という保育者養成課程の中で、本来規定されている実習以外の小児病棟実習を組み込む時間はほとんどないことが挙げられる。また、小児病棟における保育士の必要性について、その社会的な認知はそれほど高いものではない現状がある。加えて、3000を超える全国の病院を対象にした長嶋(2006)の調査によれば、保育士が配置されている小児病棟は全国の病院の約10%に過ぎず、また、配置人員も1名という回答が最も多かった(全体の34.1%)と報告されている。このように医療の現場において、慢性的な保育士不足を抱えた現状が浮き彫りにされている。

小児病棟における慢性的な保育士不足は、見方を変えれば、病院という一種独特な環境の中で病気を持つ子どもに保育を行うことができる保育士が少ない(神垣ら, 2009)とも言えよう。そもそも小児病棟とは、小児看護辞典(2007)

1 川崎医療短期大学 医療保育科

によれば、「診療科を問わず年齢15歳までの小児が入院治療を受ける病棟」のことであり、「保育士や教員などの他職種」や「入院中の小児に保育や教育の視点を導入し、小児の成長発達が妨げられないような環境を提供し、母親や家族への援助」の必要性がある病棟であるとされている。言い換えれば、心身ともに大きく成長する時期だからこそ、小児特有の専門的な分野である保育や教育が不可欠であり、そのニーズに対応可能な人材が求められるということなのである。

このように、成人に限らず小児においても入院により生じる生活面や情緒面、治療面などにおける様々なニーズに応えるために、今日の医療では医療の対象である患者を全人的に捉え、それぞれの職種がその専門性を活かして質の高い医療を提供する「チーム医療」が行われている。小児病棟においては、そのチームに保育士が加わり、チームの目標や責任を共有し保育の観点から業務を行っていく体制がとられている。そうした「チーム医療」の中における保育士の役割は「医療保育」という言葉で言い換えることができる。「医療保育」とは、帆足(2009)によれば、医療と密接にかかわるフィールドにおける保育を総称したものであり、疾病や障害など医療を要する子どもとその家族を対象として、子どもを医療の主体と捉えつつ、専門的な保育を通じて本人と家族のQOLの向上を目指すことを目的としたものである。また、これらの医療関連語は本学医療保育科における小児病棟実習の2つの目標にも合致している。すなわち、1つ目の目標が入院児を取り巻く他職種との連携の必要性についての理解であり「チーム医療」を、2つ目が小児病棟における入院児やその家族に対する援助方法についての理解であり「医療保育」を表しているのである。以上のように、小児病棟に従事する保育士には「チーム医療」「医療保育」の理解と実践が求められていると考えられる。

こうした小児病棟実習を通した学生の理解を明らかにすることは、実習をより充実したものにすると同時に、実習の事前事後指導の在り方の指針となり、実習経験と関連づくような授業展開を考える上で非常に意義深いことであると言える。一方で、学生の学びは学生それぞれの成熟度や動機づけに左右されるところが大きく、また、実習先の病院の形態(総合病院、子ども専門病院、混合病棟など)、入院している

子どもの疾患(内科系、外科系など)の違いなどにより、学びの成果は一様でないことが推測される。こうした限界を十分に認識した上で、本研究では、小児病棟実習による学生の学びを、「チーム医療」「医療保育」という医療関連語をどのように理解しているかという側面から巨視的に把握することを目的とする。

方 法

<調査対象者および調査期日>

調査対象者は本学医療保育科3年生の病児保育コース選択者39名(男性2名、女性37名;平均年齢(8月)20.54歳;(10月)20.65歳)である。

調査期日について、小児病棟実習前の2008年8月と実習後の同年10月に授業内でアンケートを実施した。分析対象としたアンケートの内容は、「チーム医療」「医療保育」のそれぞれの医療関連語について、自由記述の形式で回答を求める内容であった。アンケートの回収率は実習前・実習後ともに100%であり、有効回答率は実習前が94.9%、実習後が97.4%であった。アンケート実施に関しては、目的、集計、活用方法および集計後の管理について調査対象者に十分説明し、調査に合意した上でアンケートを行った。

<分析の手法>

分析に当たっては、分析対象である学生の自由記述回答に対し、テキストマイニングの手法を用いた。テキストマイニングとは、自由記述といったテキスト(文章)から有益な知識や情報をマイニング(採掘)する技術(林, 2002)のことであり、形態素解析や構文解析などの数量化が可能な分析である。この手法は、主観的分析に頼っていた定性情報の解析に少しでも客観性を与えることができること、また、得られた出現頻度の分析により、定性情報についてのマクロな解釈を可能にするという利点がある。特に、テキストマイニングという質的な調査方法をとることにより、量的調査では得られない新たな知見や知識、情報を取り出すことができると考えた。

一方で、自由に記述された文章から回答者の意図や潜在的なニーズを探り出すことは非常に困難な作業である。回答者によっては、質問者の意図を読み取って期待されている内容を答えることもあり得る。また、「難しい」という回答があった場合、ちょっと努力すれば乗り越え

ることができる程度の難しさなのか、努力しても到底叶わない難しさなのか、回答者によって程度の違いがあり、言語の曖昧さは完全に払拭できない。そうしたテキストマイニングの限界性を十分理解した上で、先に述べた利点を生かそうと考え、この手法を採用した。なお、形態素解析には奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発された形態素解析システム「茶筌」を使用した。

表1 形態素解析例

分析の手順は次のとおりである。まず、自由記述データの誤字脱字チェックを行った。その際、同じ意味を示す	医師	名詞	一般
	,	記号	読点
	看護師	名詞	サ変接続
	など	名詞	接尾 一般
	が	助詞	副助詞
	協力	名詞	格助詞 一般
	する	動詞	サ変接続
	合う	動詞	自立
	。	記号	句点

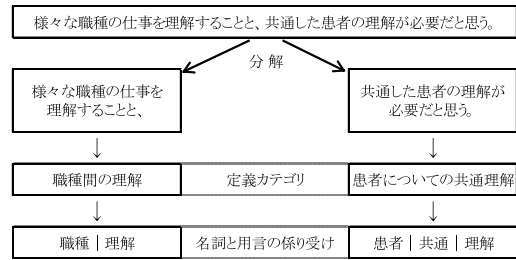
と思われる単語はどちらかに統一した（「他の職種」「他職種」は「他職種」に統一、「さまざま」「様々」「いろいろ」は「様々」に統一、など）。その後、「茶筌」を使用しての形態素解析を行った。「医師、看護師などが協力し合う。」という自由記述を形態素解析した場合、表1のようになる。形態素解析を行ったすべての自由記述を対象に、表1のような「看護（名詞-サ変接続）」と「師（名詞-接尾-一般）」に分かれてしまった形態素については、元の言葉になるよう修正を行った（この場合、「看護師（名詞-一般）」とした）。最後に、句点や読点、助詞など、その形態素だけでは重大な情報を有していないと考えられる形態素を削除し、残った形態素の出現頻度を算出した。分析対象となった形態素の品詞を表2に示す。

表2 分析対象となった形態素の品詞一覧

名詞	一般	「医師」「他職種」など
名詞	サ変接続	「連携」「理解」など
名詞	形容動詞語幹	「様々」「必要」など
動詞	自立	「伝える」「治す」など
形容詞	自立	「多い」「新しい」など
連体詞		「あらゆる」

また、さらに踏み込んだ分析を行うために、図1のように回答者の自由記述を意味のまとまりで区切り、それぞれのまとまりについての「定義カテゴリ」を筆者と分析協力者の2名で作成した。そして、作成した「定義カテゴリ」

図1 定義カテゴリ、名詞と用言の係り受け作成の行程表



について形態素解析を行い、名詞と用言の係り受けを抽出し、その出現頻度を算出した（表5・6・9・10）。なお、分析対象の形態素及び定義カテゴリの係り受けについて、出現頻度が少ないものは一般性が低いと判断し、2回以上出現するものを分析の対象とした。

結果と考察

「チーム医療」の理解について

まず、学生の「チーム医療」の理解について、小児病棟実習前のアンケート調査で得られた自由記述から、分析対象の形態素を抽出し、出現頻度の多いものから順番に並べたものを表3に示す。

品詞として多数を占めている名詞については、1位「協力」が15件、2位「職種」が14件、3位「連携」が13件、4位「専門」が11件と上位を占めており、「チーム医療」を専門の職種が協力・連携するものとして捉えている傾向がうかがえる。それぞれの職種がバラバラに動くのではなく、連携・協力するというポジティブな捉え方をしているようである。次に5位「医師」が9件、6位「患者」が8件、7位「看護

表3 実習前における「チーム医療」の形態素

順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度
1	協力	15	9	なる	4	11	関わる	2
2	職種	14	9	一つ	4	11	関係	2
3	する	13	9	仕事	4	11	共通	2
3	連携	13	9	治療	4	11	最善	2
4	専門	11	9	大切	4	11	自分	2
5	医師	9	9	分野	4	11	出し合う	2
6	医療	8	9	役割	4	11	助け合う	2
6	患者	8	10	イメージ	3	11	上下	2
6	様々	8	10	スタッフ	3	11	情報	2
7	看護師	7	10	意見	3	11	対立	2
7	人	7	10	交換	3	11	知識	2
7	他職種	7	10	考える	3	11	中心	2
7	理解	7	10	保育士	3	11	伝える	2
8	お互い	5	10	立場	3	11	働く	2
8	行う	5	11	チーム	2	11	同士	2
8	思う	5	11	感じ	2	11	導く	2
8	必要	5						

(表3から表10のタイトルの中で、「小児病棟実習」を「実習」と略す)

師」「人」がそれぞれ7件ずつという結果であり、職種や医療の対象を意味する名詞が続いていた。学生はチーム医療を提供する者、それを受ける者といった具体的な姿についても捉えていることが分かる。

では、「チーム医療」の理解は小児病棟実習後にどのように変化したのか、表3と同様に集計した結果を表4に示す。「連携」(1位←4位)、「職種」(2位変わらず)「協力」(4位←1位)といった名詞が小児病棟実習前と同様に上位に位置しているが、新たに「他職種」が7位から3位に順位を上げていることが分かる。「職種」と「他職種」について、前者は医師や看護師、保育士などのそれぞれの職種を同じ価値として平等に捉えているのに対し、後者は一つの職種から他の職種を見ているニュアンスを含んでいる。この「一つの職種」が何を意味するのかについて、学生が回答した自由記述に立ち返り分析したところ、「保育士や他職種の…(以下略)」や「保育とは違う他職種が…(以下略)」といった表現が多かった。したがって、ここでは「他職種」を「保育士から見た他の職種」として捉えることとした。小児病棟実習を経て、この「他職種」という形態素が増加したことは、学生が小児医療チームにおける様々な職種を保育士の立場から認識したことを意味すると推察される。

表4 実習後における「チーム医療」の形態素

順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度
1	連携	18	10	医療	5	13	スタッフ	2
2	職種	15	10	病気	5	13	一緒	2
3	他職種	14	11	自分	4	13	交換	2
4	協力	12	11	専門	4	13	小児	2
5	治療	11	11	病院	4	13	進める	2
6	医師	10	11	保育士	4	13	生かす	2
6	行う	10	12	お互い	3	13	提供	2
6	人	10	12	サポート	3	13	働く	2
7	患者	9	12	なる	3	13	分野	2
7	看護師	9	12	共有	3	13	問題	2
7	様々	9	12	情報	3	13	役割	2
8	する	8	13	言う	2	13	理解	2
9	大切	7	13	イメージ	2	13	理学療法士	2
						13	立場	2

また、「治療」(5位←9位)、「サポート」(12位←順位外)、「理学療法士」(13位←順位外)がランクインしている。小児病棟に身を置くことで、学生は子どもの入院生活(生活支援、医療的処置やそれに関わる医師、看護師以外の職種)の現実を知った実情がうかがえる。

次に、分析の手順でも述べた名詞と用言の係

り受けについて考察をしていく。小児病棟実習前の「チーム医療」についての係り受けは表5の通りである。

1位「職種|連携」が18件、2位「職種|理解」が7件、3位「職種|専門性|発揮」が6件、4位「職種|協力|する|治療|行う」が5件であり、上位に位置している係り受けの大半は、「職種」を中心に据えたものとなっており、これは形態素の出現頻度とも合致している。一方で、内容を詳しく解釈していくと、係り受けによって見えてくる学生の理解の新たな知見を得ることができる。その一つは、2位にある「職種|理解」である。つまり、それぞれの職種が理解し合う必要があるということであろう。また、3位のそれぞれの職種がその専門性を発揮すること、4位の職種が協力して治療を行うこと、というように学生は様々な観点から職種の動きを捉えている現状が分かる。一方で、6位の「上下|関係」、7位の「医師|中心」のように、「チーム医療」をネガティブに捉える一面も明らかとなった。また、7位に位置している「医師|同士|連携」というような、「チーム医療」の間違った解釈も学生の中の理解として垣間見える。

これに対して、小児病棟実習後の「チーム医療」に関する係り受けを一覧にしたものが表6である。

表5 実習前における「チーム医療」の係り受け

順位	係り受け	出現頻度
1	職種 連携	18
2	職種 理解	7
3	職種 専門性 発揮	6
4	職種 協力 する 治療 行う	5
5	高度 医療 提供	4
6	上下 関係	3
6	様々 職種	3
7	医師 中心	2
7	医師 同士 連携	2
7	患者 共通 理解	2
7	職種 情報 交換	2
7	相互 高める	2
7	必要 する	2

実習後も実習前とはほぼ同様な傾向が見て取れる。上位がいずれも「職種」に関連した係り受けであり、1位の「職種|連携」は21件という群を抜いて多い出現頻度となっている。そして、3位には新しく「職種|情報|共有」(4件)がランクインしている。実習の中で、

それぞれの職種が関わり合い、必要な時に情報を共有している姿を目の当たりにした結果だと言えよう。中でも特に注目すべきは、実習前に「チーム医療」をネガティブに捉えられている一面があったが、それが実習後にはなくなっていることである。小児病棟実習で、それぞれの専門職がしっかりと意思疎通をしている姿を見たのか、チームが連携して子どもに関わっている姿を見たのかなど原因を特定することは難しいが、いずれにせよ、学生が「チーム医療」を前向きなものとして捉えようとする視点に推移したと言えよう。

表6 実習後における「チーム医療」の係り受け

順位	係り受け	出現頻度
1	職種 連携	21
2	職種 協力 医療 行う	5
2	職種 連携 治療	5
3	職種 情報 共有	4
3	職種 専門性 発揮	4
4	患者 多方面 サポート する	3
5	自分 役割 果たす	2
5	病院 大切	2

「医療保育」の理解について

学生の「医療保育」の理解について、実習前の形態素の出現頻度を多い方から並べたものが表7である。

表7 実習前における「医療保育」の形態素

順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度
1	病児	31	9	元気	4
2	する	25	9	行う	4
3	保育	21	9	持つ	4
4	医療	13	9	新しい	4
4	必要	13	9	働く	4
5	学ぶ	8	10	違う	3
5	支援	8	10	関わる	3
6	精神	7	10	子ども	3
7	味方	6	11	ある	2
7	与える	6	11	できる	2
8	社会	5	11	受け止める	2
8	知識	5	11	職種	2
8	低い	5	11	多い	2
8	認知	5	11	病院	2
8	保育士	5	11	普通	2

「チーム医療」と単純比較すると、品詞では動詞の数が多くランクインしていることが分かる。2位「する」が25件、5位「学ぶ」が8件、7位「与える」が6件、以下「行う」「持つ」

「働く」と続いている。動詞の主体が回答者なのか、病棟で働く保育士なのか、それとも両者なのかは断定できないが、これらは主体者の意思に基づく動作を示した動詞で占められている。学生は「医療保育」を受動的に受け取るものではなく、主体的な判断のもとに為されるものと捉えていることが読みとれる。

名詞で見ていくと、1位「病児」が31件、3位「保育」が21件、4位「医療」「必要」がそれぞれ13件、5位「支援」が8件、以下「精神」「味方」と続いている。学生は「医療保育」の対象としての「病児」をまず意識しており、「保育」や「支援」を行うことであると認識しているようである。また4位、7位にそれぞれ位置している「必要」「味方」については、その対象が病児やその保護者なのか、それとも他のものなのかを判断することは出来ないが、学生は「医療保育」を肯定的なものとして捉えている現状がうかがえる。その一方、8位には「低い」が位置しており、「医療保育」に対する何らかのネガティブな側面を持っている学生がいることが分かる。

次に、小児病棟実習後の形態素解析結果を表8に示す。「保育」（1位←3位）、「する」（2位変わらず）、「病児」（3位←1位）、「医療」（4位変わらず）といった上位に位置する形態素

表8 実習後における「医療保育」の形態素

順位	形態素	出現頻度	順位	形態素	出現頻度
1	保育	30	14	サポート	2
2	する	28	14	ストレス	2
3	病児	25	14	よる	2
4	医療	25	14	安心	2
5	知識	14	14	医療現場	2
6	持つ	11	14	看護	2
7	できる	9	14	気付く	2
8	行う	8	14	携わる	2
9	子ども	7	14	視点	2
10	必要	6	14	実施	2
10	保育士	6	14	少ない	2
11	あらゆる	5	14	絶対	2
12	味方	4	14	入院	2
13	なる	3	14	発達	2
13	関わる	3	14	病院	2
13	健常児	3	14	病気	2
13	治療	3	14	変化	2
13	障害児	3	14	保護者	2
13	専門性	3	14	未完成	2
13	対応	3	14	様子	2
13	提供	3	14	連携	2
13	発達障害児	3			
13	遊び	3			

素は、それほど変動が見られなかった。実習後も、「医療保育」を医療の中で病児に行われる保育として捉えていたということだろう。

また、今回新しくランクインしてきた形態素の中で、11位「あらゆる」5件、13位「健全児」「障害児」「発達障害児」3件といった、病児以外の子どもの特徴を表した回答が目をつけた。これらの回答からは「医療保育」の対象がひとえに病児だけではなく、様々な特性を持つ子どもが対象であるという学生の認識が垣間見える。

一方で、「必要」(10位←4位)、「味方」(12位←7位)というように、「医療保育」を肯定的に捉える形態素が順位を下げ、新たに「実施」「少ない」「未完成」が数は少ないもののランクインしてきている。このように依然として、「医療保育」の社会的認知が進んでいない現状を回答する傾向もあった。

続いて、小児病棟実習前の「医療保育」における名詞と用言の係り受け(表9)について考察していく。実習前においては、1位「必要|する」が13件と多く、3位「病児|味方」が6件と上位に位置しているのに対し、「社会|認知|低い」が4位に位置している。これらのことから、学生は「医療保育」を肯定的に捉える面とそうではない面の両方を認識していることが分かる。

「医療保育」の対象に対する関わりについては、2位「病児|精神|支援|する」が7件で最も多く、続いて5位「病児|元気|与える」となっていた。「医療保育」の役割は、病児の精神面へのアプローチであると学生は考えていることが推測される。また、4位「医療|保育|学ぶ」(5件)と6位「医療|学ぶ」(6件)という係り受けは、「医療保育」を行う者としての必要要件を回答していると考えられ、保育

表9 実習前における「医療保育」の係り受け

順位	係り受け	出現頻度
1	必要 する	13
2	病児 精神 支援 する	7
3	病児 味方	6
4	医療 保育 学ぶ	5
4	社会 認知 低い	5
4	病児 保育	5
5	医療 知識 持つ 保育 行う	4
5	病児 元気 与える	4
6	医療 学ぶ	3
7	病院 働く	2
7	病児 関わる 保育士 働く	2

だけではなく医療についても知識を有しておく必要がある、という学生の認識を表すものであると考えられる。

こうした実習前の「医療保育」についての係り受けから、実習後どのように推移したのか、それを表10に示す。

表10 実習後における「医療保育」の係り受け

順位	係り受け	出現頻度
1	あらゆる 子ども 保育 する	7
2	医療 知識 持つ 保育士	6
3	職種 連携	4
3	病児 保育	4
3	保育 専門性	4
4	必要 する	3
4	病児 精神 支援 する	3
4	病児 発達障害児	保育
4	病児 味方	3
4	病児 様子 観察 する 力 長ける	3
5	医療 知識 持つ 保育 行う	2
5	医療現場 働く 保育士	2
5	実施 する 少ない	2
5	職種 相互 理解	2
5	保護者 味方	2

1位に順位を上げた係り受けは「あらゆる|子ども|保育|する」(7件)であった。これは、様々な特性を持つ子どもが入院してくる小児病棟において、「医療保育」にはそれらの特性に合わせて保育をすることが求められる、という学生の認識を表すものと推察される。これは、新たに「病児|発達障害児|保育」(3件)が4位にランクインしていることから裏付けられる。

次に、「医療|知識|持つ|保育士」が6件と多かった(2位←順位外)。これは、実習を通して小児病棟で働く保育士の特性を強く意識した結果であると考えられる。「医療の知識を持つ」から分かるように、保育所をはじめとした集団保育における保育士の特性とは異なるものを身に付けている、という学生の認識を示すものであろう。また、3位の「保育|専門性」(4件)、4位の「病児|様子|観察|する|力|長ける」(3件)などからも、学生は病棟で働く保育士の特徴的な側面に注目していると言える。

3番目に多かった項目の中で、実習前になかった係り受けが「職種|連携」(4件)である。また、5位には「職種|相互|理解」(2件)がランクインしており、保育士以外の職種と連

携したり理解したりするといった、「医療保育」を他職種との関連の中で俯瞰的に捉える回答もあった。また、5位には「保護者」味方（2件）が新たにランクインしており、これは医療の対象が子どもだけではなく、その保護者をも含むものである、という学生の理解を示していると考えられる。

総合考察

今後徐々に前進していくことが予想される小児病棟における保育に関連して、小児病棟実習による学生の学びを、「チーム医療」「医療保育」という医療関連語をどのように理解しているかという側面から巨視的に把握することが目的であった。自由記述の分析結果を概観すると、これら2つの医療関連語の理解は「全ての学生が」とは到底言えないが、おおむね正しくできている傾向にあると言えよう

まず「チーム医療」については、実習前後で職種間の様々な連携の取り方について学生は理解している様子が見ええた。中には、実習前に誤った認識を示している回答もあったが、実習後にはそれらを改善することができていた。また、実習前は「チーム医療」をネガティブに捉えている面が見られたが、実習後はそういった回答が皆無であった。これは実習を通して、職種間の連携の必要性、あるいは実際の連携する姿を捉えた結果であると推察される。以上のように、実習を通して、学生は「チーム医療」について正しく理解するようになったこと、医療の対象である子どもにとって、「チーム医療」は肯定的な意味を持つものである、という学びをしていることが明らかになった。

次に「医療保育」について、「医療保育」の対象は病児だけではなく、発達障害児も含めたあらゆる子どもを対象にするものだ、という学生の理解の変化を明らかにすることができた。ここからは、実習を通して「病児」を基本としながら、一時的な病気だけを持つ子どももいれば、病気以外にも発達障害を持ち合わせている子どももいる、というような「医療保育」の対象の広がりを捉えることができていると考えられる。また、それは「医療保育」の対象が「子ども」だけではなく、「保護者」も対象であるという回答があったことから言えよう。これらはおおむねの傾向として、帆足（2009）が定義する「疾病や障害など医療を要する子どもとその家族を対象として」に合致した理解を示し

ていると考えられる。一方で、社会における「医療保育」の認識について、「必要である」という回答と「社会の認知は低い」「実施しているところは少ない」という回答があったように、実習前後で的確に「医療保育」の「理想と現実」を把握する回答が多かった。この学生の姿から、実習通して医療保育の現状についての見識をより深めることができたと思えることができよう。

以上、学生の「チーム医療」「医療保育」から見た、小児病棟実習での学びについて考察してきた。そのことにより、今後の課題も見えてきたので以下に述べる。

現在、本学医療保育科では1年次、2年次と「人体と構造と機能」「病児保育論」といった医療にかかわる様々な教科がカリキュラムの中に組み込まれている。これらの教科で学ぶ理論や実践が学生の中に体系化されていく一つの機会として小児病棟実習を捉えるならば、学生の小児病棟実習の成果からそれぞれに教科内容を検討することも必要となるだろう。つまり、これは実習による学生の学びから実習の事前指導の在り方を見直したり、深めたりすることを意味する。そのことにより、実習前に「チーム医療」をネガティブなものとして捉えていた側面は改善され、「チーム医療」の意義と必要性を学んだ上で実習に臨むことができると考える。各教科で教授した内容を学生が実習の中で体系化していく作業の確認と、実習によるフィードバックから各教科の目標や内容を検討していくという「教科-実習」間の双方向性のカリキュラム開発が今後の課題である。

引用文献

- 林俊克 2002 Excelで学ぶテキストマイニング入門, オーム社
- 帆足英一 2009 医療保育士養成の現状, 小児看護 32 (8), pp1030-1035.
- 飯村直子 2009 看護師と保育士の協働に関する両者の意識の現状—日本小児看護学会の質問紙調査結果を踏まえて—, 小児看護 32 (8), pp1024-1029.
- 神垣彬子・入江慶太・笹川拓也・宮津澄江 2009 本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅰ—「医療」に対するイメージの変化からみる実習及び学内指導の効果の検討, 川崎医療短期大学紀要 29, pp71-77.

長嶋正實 2006 医療施設における病児の心身
発達を支援する保育環境に関する調査研
究, 平成17年度児童関連サービス調査研究
等事業報告書, 子ども未来財団
日本小児看護学会 2007 小児看護辞典, へる
す出版, pp. 546.